

生徒の学びを深め、つなぐ ポートフォリオ活用実践事例



ポートフォリオ導入の流れのなかで、それを学校の中で「何のために」「どう活用するか?」。ここからは、各学校や地域で、生徒の成長、校種を超えた連携、キャリアへの接続などを目指してまさに今、取り組み始めた4つの事例をレポートします。

CASE

1

探究学習や自主活動のプロセス可視化を通して
成績だけでない生徒の良さをすくいとって伸ばす

聖光学院中学校高校（神奈川県私立）

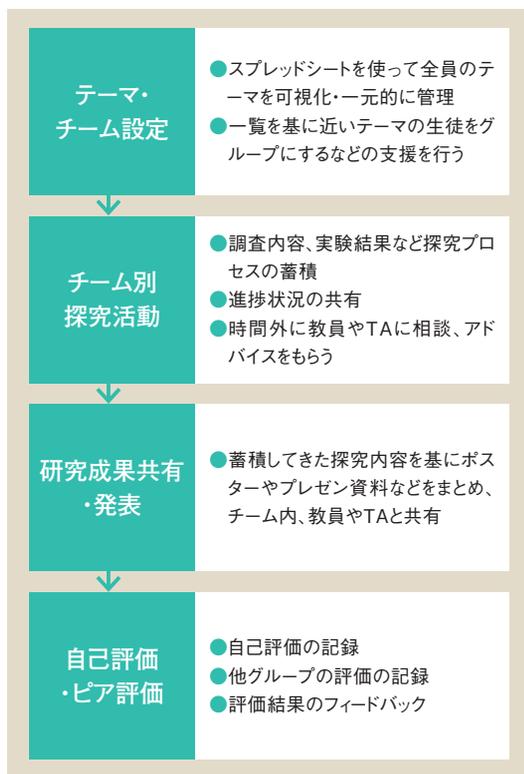
探究学習のプロセスを オンライン上に蓄積

進学実績の躍進や多彩な人材の輩出で知られる聖光学院中学校高校が、オンライン上のポートフォリオ（以下、eポートフォリオ）にいち早く取り組み始めた。将来的には、高大接続ポータルサイト「JAPAN e-Portfolio」と連携する機能の利用も視野に入れているが、導入の第一の目的は「入試活用」ではない。工藤誠一校長はこう語る。

「eポートフォリオはあくまで『生徒が自分を省みて成長するためのツール』です。利便性の高いデジタルツールを使うことで、生徒は活動履歴の蓄積や振り返りがしやすくなり、また、教員も生徒に対する理解を深めて効果的に支援するのに役立つと考えています」

同校のeポートフォリオへの取り組みの第一歩は、探究学習におけるものだった。2017年度からスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受け、研究課題の一つとして、高校1学年にグループでの探究学習を中心に据えた学

図1 探究活動におけるeポートフォリオ活用例



校設定科目を設置。昨年度は「人が視線を感じる理由」「新融雪機は北国を救うか」「睡眠の質と成績!？」などのテーマについて、各グループは教員や大学生・大学院生のティーチングアシスタント（TA）によるサポートを受けながら約半年かけて取り組んだ。

研究経過や成果の共有、評価までのほとんどをG-suite上で展開し、チーム内の情報交換や教員・TAへの相談、学びの履歴の振り返りの活性化を促進した（図1）。

「生徒たちはG-suiteを使って、授業外でも活発に活動していたようです。探究の授業は週1時間ですが、オンライン上でプロセスが可視化されることで、時間や空間の制約を乗り越えて学び



生徒のさまざまな活動



「聖光塾」

企業の協力による講座「ホテルの光で世の中をよくしよう」。ホテルの発光の仕組みを学び、その活用方法についてグループで考えた。

ボランティア活動

熊本地震復興ボランティアに参加した生徒たち。震災の爪痕を見学し、農作業の手伝いも行った。



SSHでの探究学習

年度末には約半年間の探究の成果をポスターセッションで発表。テーマは「感情のデータ化」「紙飛行機の飛距離」などさまざま。



教頭
あたか 安宅克己先生



副校長
花家 徹先生



校長
工藤誠一先生

の質を高めることができました」(安宅克己教頭)

自主的な活動を含めて

経験を効果的に成長に活かす

探究学習での手応えをもって、今年度からはスタディサプリのポートフォリオ機能を活用し、学習も含めた、生徒のあらゆる活動を記録していく。その背景には同校の教育方針がある。

同校は近年、「進学校」という枕詞にとられない挑戦を重視し、「開かれた学校づくり」や「生徒を学校に縛らない」をキーワードとした学校改革を推進してきた。

例えば、同校には教科の枠にとらわ

れない学年混合の体験型講座「聖光塾」がある。企業やNPOからの講師によるものも含め、昨年度は「遺伝子組み換え」や「ジヨブシャドウイング」など41講座を開催。主に休日や長期休業

を利用して、多くの生徒が興味・関心に応じて自主的に参加している。

また、留学や各種コンテスト参加、震災ボランティアなど、生徒が自ら校外に出て学ぶことを奨励。個人的な活動でも公欠として認める場合が多く、生徒の積極的な活動につながっている。

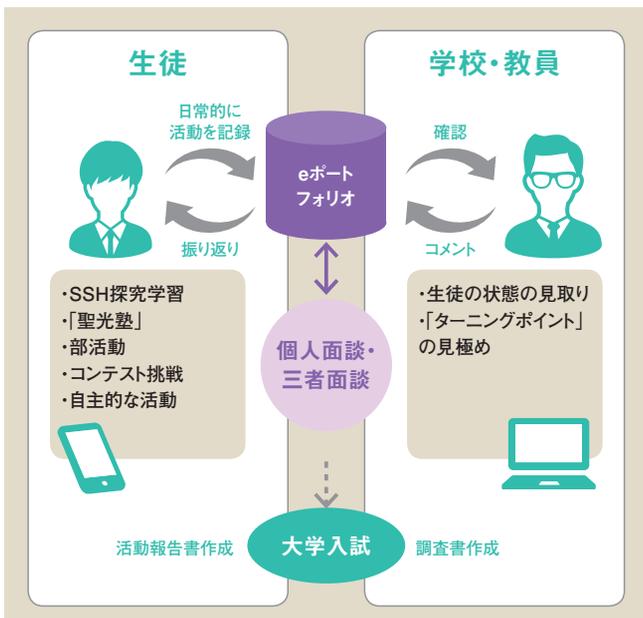
このように学校の枠組みを超えた主体的な活動の経験を、より効果的に生徒自身のなかに落とし込もうと、eポートフォリオの拡大実施に至ったのだ。

リアルタイムに活動を記録
いつでも振り返り可能に

eポートフォリオには、HRの二斉指導のなかで生徒が学校行事後の振り返り内容などを入力するほか、さまざまな自主活動についても各自のスマホやパソコンから随時記録。蓄積された情報を定期的に紐解き、学校生活の見直しや進路選択に活かしていく。

従来の執筆に取り組み、これまでの各自を振り返り成長の検証を行ってきた。eポートフォリオは、そうした機会を日常的なものにする仕掛けでもある。「生徒はいつでもどこでも自分に向き

図2 聖光学院のeポートフォリオ活用イメージ(今後の予定)



合うことができるようになりました。自分で自分を高めていくのに、とても大事なことでしょ」(工藤校長)

また、教員は生徒が記録した内容を教員用ページにて確認する。これまで生徒の多彩な自主活動に関する情報については、教員間SNSを通じて随時共有を図ってきた。SNSでは「〇〇くんは1年間でどんな活動をしてきたか」といった個人単位の把握が困難だったが、eポートフォリオなら可能だ。

「こうした機能はずっと必要性を感じていました。成績の面だけでなく、多面的に見て生徒の良いところをすくい取って伸ばすことにつながると考えています」(花家 徹副校長)

こうした情報を、教員は日常の声掛けや面談などに活かしていく。

「日々の記録からは、生徒の心の変化や精神的成長も見えてきます。ターニングポイントは人それぞれですが、そのタイミングをしっかりとキャッチし、フォローしていきたいですね」(工藤校長)

スピード感をもって導入し、まずは自由に試してみるのが、同校のスタイルだ。実績が少なく先送りしたり、最初から運用を固めたりはせず、使いながら効果的な活用方法を探っていく。

「使い方は、たいして最初の想定から変わるもの。いち早く導入し、各教員が個性を発揮しながら使ってみて、変えるべきは変えていけばいいのです。変化に対応していくには、そういう進め方も必要ではないでしょうか」(工藤校長)